

米の価格・需給どう調整

米価格への政策的対応が大きな注目を浴びている。深刻な店頭での米不足で、消費者価格が高騰している。米は日本人の主食であり、その価格が高騰することは庶民の生活に大きな不安感を与え、人々のインフレ心理にも強い影響を及ぼす。そうした状況を解消するため、備蓄米を放出して市場価格を引き下げようというのは理解できる。ただ、これまでのところ小売店に提供された備蓄米は、あっといふ間に売り切れてしまう状況である。消費者の米不足への不安感には根強いものがあるようだ。



伊藤元重の

エコノウオッチ

店頭で品不足になると、消費者の不安感が増して必要以上の購入意欲をおおる。これがさらに品不足を深刻化させる。かつて石油ショックやコロナ禍の時に、トイレットペーパーやマスクが店頭から消えた現象と同じ構図だ。消費者の不安意識をどこまで払拭できるかが、当面の大きなポイントだろう。もっとも、これは足元での短期的な対応の話だ。米の価格コントロールや需給調整には、中長期に難しい問題がいくつかある。供給サイドの問題は、年に1回しか供給されないということ

備蓄との最適関係 検討を

だ。気候条件などで不作になったとしても、供給の調整をするのに最低でも1年かかる。今回の米不足も、2023年の猛暑の影響が大きかった。需要サイドでの問題は、米が主食である必需品で需要の価格弾力性が低いということだ。価格弾力性が低いと、需給の変化に対し価格が大きく変化する。今回は猛暑という供給要因以外に、南海トラフ地震への備えやインバウンド（訪日外国人）消費の増加などが価格上昇につながったといわれる。

供給調整に時間がかかること、そして需要の価格弾力性が低いという点は、食品に共通して言えることだ。キャベツや白菜の価格が高騰して話題になったことがあるが、これも米の価格高騰と同じ現象である。経済学では「蜘蛛（くも）の巣モデル」という形で論じられている。ただ、同じように価格が大きく変動するとしても、キャベツと米では問題の重さが違う。そこで今回の米騒動の騒ぎとなった。

主食としての米の存在、そして食料の安全保障ということを考える。米の生産者価格と消費者価格にある種の制約を設定することが考えられる。供給を一定量以上に確保するためには、生産者価格を高め、設定する必要がある。もちろん、過度に高い価格を設定して過剰な生産者保護になってはいけない。米の国内需要を一定以上確保し、かつ消費者の負担を軽減させるためには、消費者価格を低めに設定する必要がある。今回の政府による備蓄米の放出による消費者価格引き下げも、そうした消費者支援という性格を持っている。

いずれにしろ、供給の確保と需要の支援を強化しようとするれば、結果的に財政負担が生じる。そのうえで、一時的な需給の変化による価格変動リスクを避けるためには、供給調整のための備蓄制度が必要となる。米価調整と備蓄制度をどう組み合わせていくのか、再度検討が必要だろう。

（東京大学名誉教授）